

# 「総合研究：20世紀アヴァンギャルド諸潮流と表象文化の現在——モダンから越境へ」を終えて

生活芸術科助教授 村田 宏

筆者は、平成10年度から12年度まで、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 [A-1]）による共同研究「総合研究：20世紀アヴァンギャルド諸潮流と表象文化の現在——モダンから越境へ」（課題番号 10301024）に共同研究者の一員として参加した。この研究においては、会報『21世紀』（1号～5号）を発刊して、会員の意見交換と研究ノート発表の場を設けるとともに、全体研究会を5回にわたって行い、2000年7月29日には、公開シンポジウム「モダンから越境へ」（於早稲田大学政治経済学部）を開催した。

共同研究自体は、2001年3月31日をもってひとまず終了したが、3カ年にわたる共同研究の成果は、同じく文部科学省科学研究費の研究成果公開促進費を得て、平成14年3月末日までに人文書院（京都）から『モダニズムの越境』（モダニズム研究会編）の書名のもとに公表される。680頁に及ぶ大冊となる予定であるが、内容構成は以下の通りであり、執筆者は、文学・思想関係を中心に総勢30名を越える。

- I. 越境の想像力
- II. 権力と記憶
- III. 表象からの越境

「越境」という総合テーマが選ばれた理由は、20世紀の文学芸術表現の状況的背景として、①多文化・多言語状況、②文化横断性、③文化とアイデンティティ等の問題系が存在し、また表象論的には、その表現が④従来の近代的自我の表象様式を超えた次元をもたらしたこと、そしてそれらが個々のレベルから社会的現実へと向かう過程で、⑤表現と権力の問題が大きく浮上したことなどによっている。

ちなみに筆者は、「II 権力と記憶」のセクションにおいて、ファシズムと共産主義が鋭く対立した、いわゆる「赤い30年代」の人民戦線成立期のフランスの美術と政治のかかわりを、画家フェルナン・レジェを事例として考察した。

『モダニズムの越境』刊行によって、モダニズムを軸とした20世紀文学芸術の総合的見取り図と、今後の表現文化論への展望が多少とも明快に開けることを願うものである。